

ガジュマルキーパー

奄美市立朝日小学校

五年 濱田 琉陽

「あつ、しまった。」

また、点を入れられてしまった。

「ドンマイ、ドンマイ。」

味方チームは、気にするなつて言つてくれるけど、六
点も続けて入れられると、けつこう落ちこむ。

ぼくは信一。最近、このサッカーチームに入った。
一番好きなポジションはゴールキーパー。なぜかとい
うと上手な人たちのシュートを止めたときなんか最
高に気持ちいいからさ。まだレギュラーじゃないけど、
毎日毎日練習している。早く上手になつてたくさん試
合に出て、チームのために活やくしたい。それが今の
ぼくの目標なんだ。

だけど、どうしたんだらう。今日の紅白戦は全然試
合に集中できなかった。帰る前に監督に声をかけられ
た。

「信一、お前今日の紅白戦のとき、どうしたんだ？」

「……いや、何というか、全然試合に集中できませ
んでした。」

「だいじょうぶか？ 体調管理はしっかり自分でする
んだぞ。」

「はい。」

監督はちゃんと見ててくれたんだ。いかんいかん、
これじゃあだめだ。よし、明日からは気合いをいれる
ぞ。

みんなと別れて、人通りの少ないさびしい道に入っ
た。あたりは少しずつ暗くなつてきている。真つ
暗になる前に急いで帰らなくちゃ。ぼくは走り出した
でも、走つても、走つても家につかない。

「道まちがえたのかなあ？ もどろうつと……。」

ところが、ふりかえると道はなくなり、ぼくが立っ
ていたのは、草むらだった。空にはもう月が出ている。

ぼくは泣きたくなつた。

「ここ、どこだらう。」

その時、月が一しゅんピカツと強く光つた気がした。
とつ然空から、

「お前が信一か。今夜はわしがキーパーのことをいろ
いろと教えてやる。」

「だれ……。どこにいるの？」

「お前の真後ろにいるではないか。」

後ろを見てもだれもない。大きなガジュマルの木
があるだけ。

「上を見てみよ。」

ガジュマルの木の上を見上げると、しゃべっていたんだ。

「うわあ。」

「そんなにこわがらんでもよい。わたしは、お前と同じじゃよ。」

「ぼくと同じってどういう意味？」

「わたしはジュモクイレブンのGK。みんなにはガジュマルキーパーと呼ばれておる。」

「キーパーって、サッカーの？」

「当然じゃ。」

「木もサッカーするの？」

「木は人間なんかよりもたくさん足の長さがあるから、ものすごい試合じゃよ。月夜の晩に地しんがあつたら、それはわしらが試合をしていると思つてよい。」

「なんでぼくはここに來れたの？」

「紅白戦をひとつたじやろ。わたしはそれを見ていたのさ。そしてお前に息をふきかけたから、わしらの世界に入つて來られたというわけじゃ。」

「でも、なんでぼくなの？」

「そりやあ、お前には才能があると見たからじゃ。」

「えっ、でも才能があるんなら、すぐにレギュラーになれるんじゃない。ぼくはまだ第二キーパーなんだ

けど……。」

「いやいや、お前にある才能は、サッカーの才能ではなく、努力する才能じゃ。」

「へ？」

ようは、努力さえすれば、とても上手になるというのだ。

「いいか、ポイントをしつかりおさえて練習するんじや。お前の弱点はサイドネットじゃ。お前はジャンプ力があるから、空中のシュートは止められる。しかし、地面に飛びこむことにはきょうふ心があるから、サイドネットのゴロは止められないんじやよ。こわがらずに思いきり飛びこむんじや。」

ガジュマルキーパーの話聞いていたぼくは練習したくてたまらなくなつてきた。

「でも、帰りがおそくなつたら、家のみんなが心配するよ……。」

「だいじようぶ。お前の世界とわしらの世界は時間の進み方がちがうんじや。お前が五時間練習しても、もとの世界じゃ一分しかたつておらん。」

「よし、ガジュマルキーパー。よろしくお願いします。」

ぼくは気合いを入れた。ガジュマルキーパーのアドバイスを何度もとなえて、イメージし、くり返し練習

した。あきらめないぞ、ぼくには努力する才能があるんだ。ぜったいにうまくなってみせる。

体がへとへとになってすわりこんだ時、

「よし、これまでじゃ。よくやったな信一。」

「ガジュマルキーパー、ありがとう。明日の練習でも、教えてもらったことをイメージしながらがんばるよ。」

立ち上がると草むらはなくなり、いつもの道があった。大きなガジュマルもなくなっている。

「努力する才能か……。」

ぼくの心の中は、もう明日の練習のことではいっぱいだった。

「ようし、がんばるぞー。」

次の日の練習試合で、ぼくは後半、キーパーをまかさされた。

「おそれず、飛びこめ。」

というガジュマルキーパーのことばを何度もとなえて、ボールにしがみついた。

今日は、一点も決めさせなかった。

「お前には努力する才能がある。」

ガジュマルキーパーの声が聞こえたような気がして、コートの後ろの山を見ると、すずしい風が吹いて、大きなガジュマルが笑ったような気がした。

